

ほっかいどう福祉だより【しあわせ】

SHIAWASE



ふくしる

発達障がいのお子さんとその家族を支援する取り組み

MY WORK

飽くなき情熱と行動力で
挑戦を続ける

Discover Hokkaido

製本技術から生まれた
ステーションナリー「booco」

INFORMATION

セミナーの
ご案内



「ふくしる」は、「福祉」と「知る」を合わせた造語で、福祉をもっと知ってほしい、という願いを込めました。

発達障がいのお子さんと その家族を支援する取り組み

自閉スペクトラム症(自閉症)をはじめとする発達障がいのある人を、幼児期から支援する体制づくりが進んでいます。自閉症の人たちへの支援に力を注ぐ「社会福祉法人はるにれの里」と、同法人が運営する「児童発達支援センターさんりんしゃ」に、自閉症の特性や支援体制、お子さんと家族を支える取り組みなどを聞きました。

多様な特性のある自閉症

メディアなどで取り上げられることが増えている発達障がい。その一つとして知られるのが自閉症です。社会福祉法人はるにれの里は、約40年にわたり、自閉症の人とその家族を支えてきました。理事長を務める加藤潔さんは「自閉症の特徴は、人との関わりや集団の中での振る舞いなど、社会的なコミュニケーションに困難があることです。例えば、

言葉の裏にある意図をくみ取ることが苦手なため、言葉通りに受け止めてしまうことがあります。また、見えないものや知らないことを想像するのが難しく、急な予定変更や新しいことへの対応が苦手な人もいます。そのため、特に人との関係性にずれが生じやすく、多数派の人とは異なると思なされてしまうのです」と話します。

自閉症の人は、脳の中枢神経の動



長年、自閉症の人の支援に関わってきた加藤さんは、講演会や研修会などの講師も務めています

きに特性があり、できることでできないことに差が生じます。しかし、外見からは障がいのあることがわかりにくいいため、誤解を受けることも多く、そうしたことが日常生活の困難さにつながっています。加藤さんは「ほかの人とは違っていても、決して劣っているわけではないということを知ってほしい」と言います。

早期からの療育が重要に

近年は幼児期から発達障がいの対応に力を入れる自治体が増え、乳幼児健診などをきっかけに診断に結び

輪を広げ、みんなで支える

家族への支援も重視しています。「お子さんの得意なことや、興味・関心、日々の小さな変化、ご家族の気持ちや思いなど、二つの対話を積み重ねながら、お子さんの成長を共に喜び合えるよう、ご家族と一緒に考えることを大切にしています」と京谷さんは話します。昨年から連絡用のアプリケーションを導入し、より密接なやり取りができるようになりまし。また、「自閉症の子どもを育てた経験を持つ人から話を聞きたい」という声に応え、家族同士が交流する機会も設けています。

子ども発達支援や教育に関わる機関との連携推進も重要な役割です。札幌市では市内に9つある児童発達支援センター間で情報共有を図るほか、地域の児童発達支援事業所などを訪問し、「顔の見える関係」を築くことで、支援体制を強化して



一人一人の特性に合わせて、さまざまな活動を取り入れています



職員やほかのお子さんとの関わりが、さまざまな力を伸ばすことにつながります

一人一人に合わせた支援を

められており、児童発達支援や放課後等デイサービスなどの通所サービスも拡充されています。そうした福祉サービスは、自治体に申請し「通所支援受給者証」の交付を受けることで利用できます。

自閉症をはじめとする発達障がいのあるお子さんへの早期療育を目的に、はるにれの里が立ち上げたのが「さんりんしゃ」です。2013年から札幌市が指定する児童発達支援センターとして、未就学のお子さんへの発達支援や家族へのサポートを行ってきました。現在、児童発達支援センターは、地域の支援機関や教育機関などとの連携推進を図る中



お子さんが力を発揮できる環境をご家族と一緒に考え、お子さんを褒めること、認めることをチームで大事にしています

現在は保育園や幼稚園と並行して児童発達支援に通うお子さんも増えてきています。児童発達支援の中核施設として地域の保育園や幼稚園とのつながりを深め、情報交換を行い、そのお子さんへの理解を深めてもらえるように力を入れています。



集団で遊びながら人とのコミュニケーションを学んでいきます



家族と信頼関係を築き、共に考えることを大切にしています

います。また、発達に不安のあるお子さんの家族から依頼を受け、お子さんが通っている保育園や幼稚園、小学校を訪問し、アドバイスなどのサポートを行う「保育所等訪問支援」にも積極的に対応しています。「保育園や幼稚園、学校などとも手を取り合い、ご家族と共にお子さんを支えていく地域づくりを目指しています。悩みや困ったことがあれば、ぜひ頼ってほしい」と京谷さんは言います。地域が連携し、途切れることなくお子さんの成長を支援していく取り組みが始まっています。

社会福祉法人はるにれの里
児童発達支援センター
さんりんしゃ
札幌市西区福井4丁目3-5
TEL.011-666-7781
<https://harunire.or.jp/sanrinsha/index.html>
2013年に児童発達支援センター事業を開始。自閉症などの発達障がいがある未就学のお子さんを対象に、家族や地域の専門機関と連携しながら、それぞれの特性に合わせた支援を提供しています。

地域の障がい者福祉に貢献するため飽くなき情熱と行動力で挑戦を続ける



1984年に入職した田口さん。たくさんの人との出会いを原動力に働いてきました

福祉の世界で働く魅力の一つが、人との出会いです。「人と接する仕事がしたい」と福祉の世界に入り、40年以上にわたって人とのつながりを育んできた法人の常務理事に、人に支えられたエピソードや福祉の仕事への思いを伺いました。

人と接する仕事に惹かれて

社会福祉法人千歳いずみ学園は、障がいのある人に対し、生活介護や就労支援、共同生活援助などの幅広いサービスを提供しています。法人の常務理事を務め、共同生活援助事業所「いずみ寮」の管理者としてグループホームを統括する田口幹子さんは、1984年に入職しました。

入職前の田口さんは、短大で学んだ英語を生かして人と接する仕事を指していました。しかし、希望していた就職がかなわず、卒業後、しばらく進路を模索していました。そんな折、千歳いずみ学園が事務職員を募集していることを知り、施設を見学したことが転機になりました。「福祉のことは何も知りませんが、利用者の純粋さや温かな雰囲気や心に残り、ここで働きたい」と感じました。専門知識がなくても事務なら何とかなるだろうという思いと、何よりも人と接する仕事がしたい、という気持ちに背中を押されました。

事務職から現場リーダーへ

入職後、田口さんは事務職員として働きながら、時間を見つけては積極的に現場職員の仕事を手伝い、利用者さんたちと関わっていきまう情熱と、「求められたら突き進む」という行動力で、挑戦を続けてきました。

た。「わずかな時間でも利用者さんと触れ合えるのが楽しく、福祉の仕事が好きかもしれない、ずっと続けられるかもしれないと思うようになりました」と振り返ります。

入職10年目に、ターニングポイントが訪れました。定年退職を迎える職員に代わり、指導主任の役割に就くことを打診されたのです。現場を手伝っていたとはいえ、専門的な知識や技術を学んだ経験はなく、田口さんは「自分に務まるのか」と悩んだといいます。その時、力になってくれたのが先輩の支援職員でした。「私たちが支えます」という言葉に励まされ、思い切って引き受けました。こうなった以上、安易には辞めるわけにいかないと覚悟しましたが、これほど長く働くことになるとは想像していませんでした」と笑います。

事務職員から現場を管理する立場へ。田口さんは、働きながらケアや職員育成について学び、リーダーとして求められることを常に考え、現場のチームづくりに尽力しました。

人との出会いが挑戦の力に

田口さんが「二度目のターニングポイント」と話すのが、2002年の居宅介護事業の立ち上げでした。

地域のためにできることを

現在の田口さんの仕事は法人のマネジメント業務のほか、9力所あるグループホームの管理業務や職員のサポート、夜間の利用者さんの急病対応、児童発達支援事業所のフォローなど多岐にわたります。また、千歳市障がい者自立支援協議会の副会長も務め、地域福祉に貢献する活動にも精力的に携わります。

障がい者福祉を支えていく上で、田口さんが最も重視しているのが、人材の確保と育成です。得意なことを生かせるような配置の工夫や、若手職員が法人の将来を考える委員会活動などを通し、やりがいを持って働くことができる職場環境づくりを進めています。

地域のニーズに応えるため行動を続けてきた田口さん。40年以上にわたる経験を踏まえ、福祉の世界で働



グループホーム事業の管理者として、現場を担う職員のサポートも重要な仕事の一つです



法人の常務理事でもある田口さん。外部の会議や勉強会への出席も多く、常にアクティブに活動しています



補聴器を外すの手伝う田口さん。利用者さんの中には数十年にわたってお付き合いが長く方もいます

未知の分野でしたが「サービスを必要とする人がいるならやってみよう」と、所長を引き受けました。当時、障がいのある人を対象にした居宅サービスは始まったばかりでした。「待っていた」と歓迎するご家族がいる一方で、不安視する声もありました。地域の理解を得ようと試行錯誤する田口さんを支えたのが、「うちの子どもと一緒に、サービスを育てていけばいい」と声をかけてくれたご家族の存在でした。「お母さんたちの協力のおかげで活動が広がり、児童の日中一時支援事業などにもつながりました。そうした出会いがあったから、前に進むことができたのだと思います」

く人たちに、こうエールを送ります。「福祉の仕事の魅力は多くの人と出会い、深く関わり合えることです。私もたくさんの人と出会い、助けられてきました。時には壁にぶつかり、思い悩むことがあっても、今できることをコツコツと続けていけば、いつか目の前が開けるはずですよ。周りの力も借りながら、あきらめることなく、福祉の仕事に向き合っていくことが、嬉しいと思います」

社会福祉法人 千歳いずみ学園 共同生活援助事業所 いずみ寮

千歳市春日町3丁目5-1
TEL.0123-26-6566
<https://izumigakuen.or.jp/pages/38/>



1968年「社会福祉法人千歳いずみ学園」設立、1991年グループホームいずみ寮事業開設。法人設立から60年近くにわたり、障がいのある人の自立と社会参加に向けた支援に力を注いできました。現在は施設入所支援、生活介護、就労継続支援B型、児童発達支援などの幅広い事業を通じ、地域の障がい者福祉を支えています。

石田製本株式会社

札幌市西区発寒16条14丁目3-31

TEL.011-661-5670

9:00~17:00 土曜・日曜・祝日休

<https://booco.i-bb.co.jp/>



左/製本アドバイザーを務める今村さん。「いつか海外向けの商品も作ってみたい」と夢を語ります 中/商品はboocoのウェブサイトで購入できます 右/本と同じように隅々まで丁寧に仕上げられています

製本技術から生まれたステーションリー

booco

伝統的な製本技術を用い、時間と手間をかけて丁寧に作られるダイアリーやノートがあります。90年続く製本会社が生み出した、こだわりと遊び心あふれる文具ブランド「booco (ぼっこ)」の魅力を紹介しします。

Discover Hokkaido SAPPORO



製本会社発の文具ブランド

アナログの魅力が見直され、人気が高まっている文具。本のようなダイアリー（手帳）やノートが、文具好きの心をくすぐると評判なのが「booco」です。

boocoを作っているのは、1936年創業の「石田製本株式会社」。長年培ってきた高い技術で、書籍や雑誌、パンフレット、手帳など、さまざまな製本の注文に応えてきました。同社でboocoの企画や販売促進を担当する今村琢さんは「近年のデジタル化やコロナ禍の影響で製本の受注が減る中、このままでは引き継いできた技術や伝統が失われてしまう、という危機感が社内にありました。製本のノウハウを生かして新しい挑戦をしたい、という社員たちの思いが高まり、オリジナルの文具を作ることにしました」と話します。

技術とアイデアをかたち

目指したのはハードカバーの本のようなノートでした。製本職人の意見や工場スタッフのアイデアを取り入れながら試作を繰り返し、2020年2月にboocoブランドの

取りたくなる楽しさにあふれています。今村さんは「1冊に複数の色の紙を使ったり、ページをとじる糸をカラフルにしたり、細部にまで製本会社ならではの技術と遊び心を詰め込みました」と笑顔で語ります。主力は一貫してダイアリーとノート。北海道在住のイラストレーター高旗将雄さんが描くクマのイラストが人気のダイアリーや、型抜きしたクマやモモンガのシルエットを窓に見立てた「北海道の窓シリーズ」など、デザイン性と機能性を兼ね備えた商品を作り続けています。

再評価される製本の技術

boocoの人気が高まるとともに、外部とのコラボレーションが増えています。これまでに札幌市



凝ったデザインが自慢のダイアリーとノート



ブランド名の由来は「ぼっこ手袋」。優しさと温もりのある文具に、という思いを込めました

ノートが発売されました。

発売当初から、そのこだわったつくりが話題となり、全国展開する有名雑貨店でも取り扱われるほど反響がありました。しかし、返品などによって在庫が増えたことから、販売戦略を見直すことに。そこで、今村さんが中心となり、SNSでこまめに情報発信をしたところ、自社の直販サイトでの注文が増えていきました。その後、東京で開かれた文具イベントへの出展をきっかけに、新しいファンをつかみ、boocoの世界観や文具としての質の高さへの共感

本のように開く楽しさ

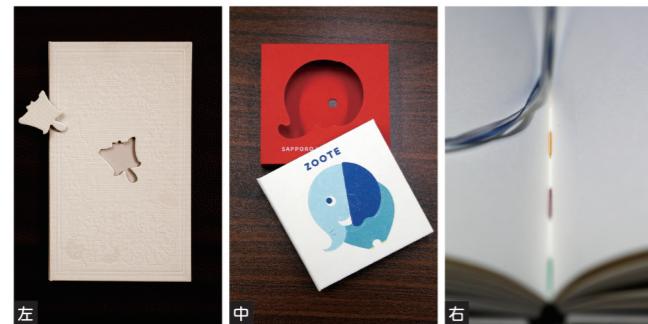
boocoの特徴は、ハードカバーであること、ページの背の部分で縫ってとじる「糸かがり」という製本技術が用いられていること。ページがフラットに開くため書きやすく、長く使っても壊れにくい仕様になっています。また、カバーに多彩な加工やデザインを取り入れているのも魅力の一つです。手触りの良い布貼りタイプや、表紙に抜き加工を施したものなど、思わず手に



伝統的な製本技術を守る工場でboocoは生まれました

円山動物園やエア・ドゥなどとのコラボ商品を手がけたほか、進行中のプロジェクトもあるといいます。「boocoをきっかけに、他社のグッズ製造を受託できれば、という狙いがありました。その期待通り、当社のもづくりの姿勢や技術力が改めて評価され、新しい商品展開の可能性が広がっています」と今村さんは手応えを語ります。

製本会社のこだわりとブランドから生まれた文具ブランドbooco。大量生産にはない温もりや質の高さが、多くの人に支持されています。



左/表紙の抜き加工が楽しい「北海道の窓シリーズ」(2,200円)
中/札幌市円山動物園とのコラボ商品「ZOOTE (ズート)」(1,320円)
右/カラフルなとし糸など随所に遊び心が

ルイス食堂

甘エビの頭でとっただして作るルーカレーの専門店。チーズで覆ったライスにエビフライをのせた「チーズドームスペシャル」(1,200円)が人気。月替わりの限定カレーにも注目。ルイスカレー(1,500円)、エビカレー(1,200円)
札幌市西区西野7条2丁目7-12遠山ビル1F
TEL.011-600-2778 11:00~19:30ラストオーダー
月曜・第3火曜休



欧風菓子 末武

創業90周年を機に、2024年に倶知安町から移転。こだわりの製法を守り、焼き菓子やケーキなどを作り続ける。看板商品を詰め合わせた「羊蹄山麓」(1,200円)は手土産に最適。ガトー・オー・ノア(350円)、パイマロン(350円)
札幌市西区二十四軒2条3丁目2-28 TEL.011-688-8851
11:00~16:00 月曜・火曜休



*情報は2月取材時点のものになります

札幌市西区立ち寄りグルメ

SHIAWASE クロスワード

Q.二重マスA~Eでできる言葉は何でしょう？

[タテのカギ]

- 5月5日、お風呂に浮かべる葉は？
- 働きや努力に感謝し、〇〇をねぎらう
- 神社であげます。「祝詞」の読み方は？
- 災害や不測の事態に備え、いざという時に対応できる〇〇管理能力
- 道内では札幌と函館で走る、〇〇〇電車
- 司会者を表すアルファベット2文字は？
- 犬も歩けば〇〇に当たる
- 物事をうまくこなす要領、かんどころ
- 蓄え、在庫品
- 目には青菜 山ほととぎす 〇〇〇〇〇
- 6月の花嫁を意味するジューン〇〇〇〇
- 校倉造りと書いて、〇〇〇〇づくり
- 高齢者や障がい者の日常生活での不便さをなくする取り組みは〇〇〇フリー

[ヨコのカギ]

- 俗に、冷蔵庫や洗濯機は〇〇〇〇家電
- 父の日に贈る花の色として定着しつつある
- 〇〇の東西を問わず
- 事業などにより得る儲け
- 衣服で上半身がトップなら、下半身は？
- 精も〇〇も尽き果てる
- 本や新聞の数
- 〇〇〇駅⇄終着駅
- くるぶしより丈が長い靴をカタカナで
- 鮎飯に締めサバを乗せ箱型で押した食品
- 医療や肌着で用いられる柔らかい綿の布
- 地球の表面の3割弱です
- よっつ⇒？⇒むっつ
- 鎌倉⇒室町⇒安土桃山⇒？
- 無一文であることを昆虫で表わすと？

1	2		3 C		4		5
6			7	8			
			9 D			10 A	
11	12			13	14		
			15				16
17					18		
19 E			20 B				
		21			22		

こたえ

A	B	C	D	E
---	---	---	---	---

作：石田竹久



手芸品セットを20名様にプレゼント!



江別市にある生活介護事業所「なでしこ」の利用者さんが、一つ一つの糸に願いを込めて制作した手芸品です。作品づくりの過程では、ボランティアの皆さんにもご協力をいただき、多くの人とのつながりの中で生まれています。完成した手芸品には、日々の感謝の気持ちと、使う方の幸せを願う思いが込められています。ぜひ、なでしこの手芸品を通して、新しい流行と温かな輪を一緒に広げていきましょう。お問い合わせは(社福)えべつ幸誠会「なでしこ」、電話011-382-0550へ。
※色柄やセット内容はそれぞれ異なり、全てオリジナルの一点物となっています。
※冬(1月)号の答えは「ユキダルマ」でした。当選者の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

応募のきまり

締め切り:2026年5月31日(日)23:59

応募方法:右の二次元コードよりご応募ください。

ハガキの場合は①クロスワードの答え②郵便番号③住所④氏名(フリガナ)⑤性別⑥年齢⑦電話番号⑧お勤め先⑨本紙の感想を明記の上、〒060-0001 札幌市中央区北1条西7丁目プレスト1・7(4階) 北海道民間社会福祉事業職員共済会「しあわせ」係までご応募ください。
※皆さまから寄せられたご感想などは本紙に掲載させていただく場合があります。掲載された方には「しあわせ」オリジナルグッズをプレゼントします。



読者さんからののお便り

Voices

冬号(145号)を読んで

- バラスポーツは、障がいのある人だけでなく高齢者にも応用できるとわかり、ぜひ施設でも参考にしたいと思いました。(釧路市・Oさん)
- 「MY WORK」の記事では、福祉を知らなかった若者が、利用者さんと共に歩み成長しながら働く中で仕事の喜びや生きがいを見出していき姿が印象的でした。(奈井江町・Tさん)
- 伊達市は野菜がとておいしくところ。特集されていた長芋も道の駅で売っていて、親しみがわきました。(伊達市・Mさん)

各種公益セミナーを開催します 参加費無料

北海道民および本会会員を対象に、研修による学びの場を提供しています。詳細は、[本会ホームページTOP「セミナー・研修会」](#)からご確認ください。

【オンライン研修】 ※詳細案内は開催月の前々月中旬に公開予定です。

6月25日(木) 10:00~16:00 Z世代の育て方(中堅職員・管理職向け)

7月15日(水) 10:00~16:00 分かりやすい資料の作り方(若手職員・中堅職員向け)

令和8年度 第1回福祉職場説明会を開催します 60法人出展予定

福祉職の魅力や職場の具体的な情報提供を行い、就業意欲を高めることを支援するとともに、人材の安定的な確保と定着の推進を図ることを目的に開催しています。参加法人のPRタイムや個別面談コーナーを設けておりますので、お気軽に足をお運びください。

【開催日】 2026年7月5日(日)

【会場】 札幌ビューホテル大通公園

【問い合わせ】 北海道社会福祉協議会 北海道福祉人材センター (直通電話)011-272-6662

※中止・変更となる場合は、ホームページでお知らせいたしますので、ご確認のうえご来場ください。



ほっかいどう福祉だより「しあわせ」

SHIAWASE

発行/一般社団法人 北海道民間社会福祉事業職員共済会

札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 4階

TEL.011-251-3828 FAX.011-251-3848

<https://www.kyousaikai-shiawase.jp> [Email] kouhou@kyousaikai-shiawase.jp